平成３０年度　各種調査結果等を活用した学力保障の取組事例

事務所名	沿岸南部	学校名	陸前高田市立高田第一中学校	ＴＥＬ	0192-55-3921

一人一人が自ら学ぶ力を身につけた生徒の育成

【今年度の目標】

（１）　教員一人一人が自分の授業での学習指導における解決すべき課題を設定し、授業改善を図ることができるような OJT システムを構築する。
（２）　言語活動を重視した授業展開を身につけるためのアクションリサーチ（以下 AR)を実施する。
※以下、「確かな学び、豊かな学び」実現プランの目標
（３）　全国学力・学習状況調査、学習定着度状況調査（以下全国学調、県学調）における各教科の正答率で全国比、県比１０５以上（全国学調Ａ問題においては１０３以上）を目指す。
（４）　標準学力調査における各教科の正答率で全国比１０５以上を目指す。
（５）　全国学調、県学調における各教科の全ての問題で、無解答率が全国・県より下回る傾向を継続させる。
（６）　学校経営の重点「主体的かつ諦めずにやり抜く態度の育成」を鑑み、学校評価（生徒）で「授業が分からないところは、自分で調べたり先生に質問したりするようにしている」と答える生徒８５％を目指す。
（７）　中３段階で英検３級取得４０％以上を目指す。

【組織的な対応を図る上で工夫した点】

（１）　教員一人一人が自分の課題を意識し、積極的に「授業づくり３つの視点」と「言語活動の充実」を重視した授業改善に取り組むことができるよう、AR の手法を取り入れた。また、年２回（５・１１月）の「授業参観週間」を設定し、全ての教員が同僚の授業を参観することによって、AR の資料として活用できるようにした。
（２）　学年の特徴にあった家庭学習の指導を大切にしながらも、生徒が主体的に家庭学習に取り組むことができるような学習方法を提案し、それに沿って取り組む期間を設定した。
（３）　校区内小学校の教務主任が連携を図り、「小中連携アクションプランリーフレット」を作成し、全家庭に配付することで、家庭を巻き込んだ小中連携の取組を実施した。

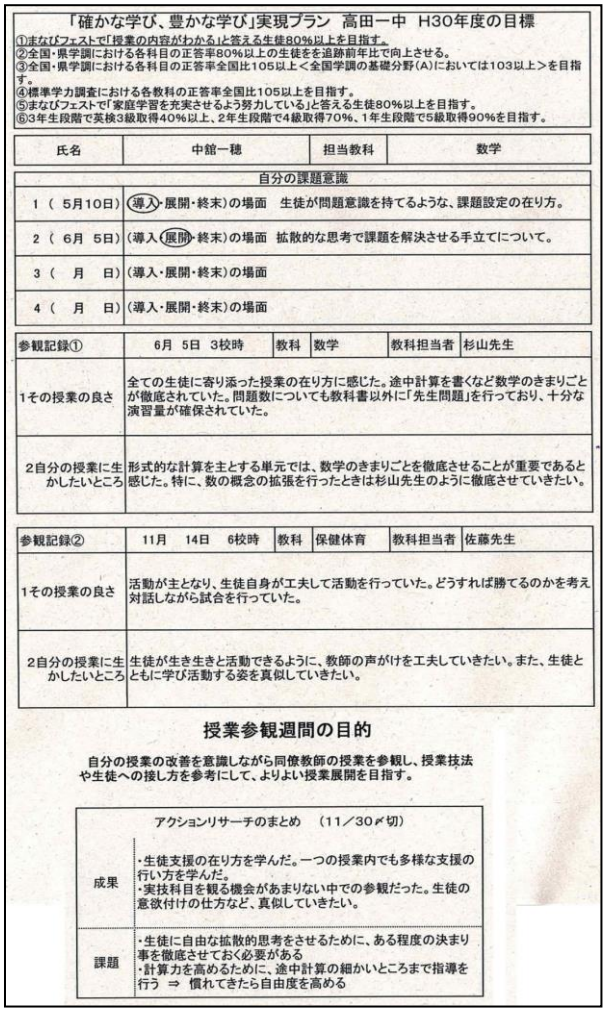
【具体的な取組】

（１）　AR と授業参観週間の取組
教員一人一人が「授業づくり３つの視点」と「言語活動」を重視し、自身の授業力を向上させるための OJT として実施した。

①年２回の授業参観週間
第１回：５月２８日（月）～６月８日（金）
第２回：１１月１２日（月）～１１月２２日（木）

②AR の実施
あらかじめ設定した各自の授業課題に対して研究を進め、上記授業参観週間に得た知見も含めて AR に取り組むことで、授業力の向上を目指した。

③AR の具体例
採用２年目、中舘教諭（２学年３クラスの数学を担当）の当初の課題は、「生徒が問題意識を持てるような、課題設定の在り方」であったが、授業参観を通して課題意識が変化し、１回目の授業参観後、課題を「拡散的な思考で課題を解決させる手立てについて」に変更した。
１回目の授業参観において、数学先輩教員の授業を参観した後、自分の授業に生かしたい点として、「形式的な計算を主とする単元では、数学のきまり事の徹底が重要」との知見を得て、２年数学における数概念の拡張の授業に反映したいとした。
２回目の授業参観週間では、保健体育の授業を参観し、



「確かな学び、豊かな学び」実現プラン　高田一中　H30年度の目標

①まなびフェストで「授業の内容がわかる」と答える生徒80%以上を目指す。
②全国・県学調における各科目の正答率80%以上の生徒をを追跡前年比で向上させる。
③全国・県学調における各科目の正答率全国比105以上＜全国学調の基礎分野(A)においては103以上＞を目指す。
④標準学力調査における各教科の正答率全国比105以上を目指す。
⑤まなびフェストで「家庭学習を充実させるよう努力している」と答える生徒80%以上を目指す。
⑥3年生段階で英検3級取得40%以上、2年生段階で4級取得70%、1年生段階で5級取得90%を目指す。

氏名	中舘一穂	担当教科	数学

自分の課題意識

1（ 5月10日）	(導入)・展開・終末）の場面　生徒が問題意識を持てるような、課題設定の在り方。
2（ 6月 5日）	（導入・(展開)・終末）の場面　拡散的な思考で課題を解決させる手立てについて。
3（ 月 日）	（導入・展開・終末）の場面
4（ 月 日）	（導入・展開・終末）の場面

参観記録①	6月 5日 3校時	教科	数学	教科担当者	杉山先生
1その授業の良さ	全ての生徒に寄り添った授業の在り方に感じた。途中計算を書くなど数学のきまりごとが徹底されていた。問題数についても教科書以外に「先生問題」を行っており、十分な演習量が確保されていた。				
2自分の授業に生かしたいところ	形式的な計算を主とする単元では、数学のきまりごとを徹底させることが重要であると感じた。特に、数の概念の拡張を行ったときは杉山先生のように徹底させていきたい。				

参観記録②	11月 14日 6校時	教科	保健体育	教科担当者	佐藤先生
1その授業の良さ	活動が主となり、生徒自身が工夫して活動を行っていた。どうすれば勝てるのかを考え対話しながら試合を行っていた。				
2自分の授業に生かしたいところ	生徒が生き生きと活動できるように、教師の声がけを工夫していきたい。また、生徒とともに学び活動する姿を真似していきたい。				

授業参観週間の目的

自分の授業の改善を意識しながら同僚教師の授業を参観し、授業技法や生徒への接し方を参考にして、よりよい授業展開を目指す。

アクションリサーチのまとめ　（11／30〆切）

成果	・生徒支援の在り方を学んだ。一つの授業内でも多様な支援の行い方を学んだ。 ・実技科目を観る機会があまりない中での参観だった。生徒の意欲付けの仕方など、真似していきたい。
課題	・生徒に自由な拡散的思考をさせるために、ある程度の決まり事を徹底させておく必要がある ・計算力を高めるために、途中計算の細かいところまで指導を行う ⇒ 慣れてきたら自由度を高める

中舘教諭の授業参観シート

生徒の意欲付けの仕方や、対話をとおした授業展開を学び、自身の課題として「生徒に自由な拡散的思考をさせるために、ある程度の決まり事を徹底させておく必要がある。」とまとめた。

管内初任研で２年目の先輩教員の授業として行った研究授業は、AR で培われた成果が発揮された。生徒観と指導観に生徒の現状（基礎的・基本的な学習内容が定着していない点、生徒が数学的な説明の必要性を感じていない点）から、生徒に寄り添った指導の必要性が示されている。また、展開案では予想される生徒の反応を示し、自力解決の際の視点を提示することで拡散的な思考に方向性をもたせるよう意識して授業を構想した。

AR と授業参観により、生徒の自由な拡散的思考と言語活動による授業展開を大切にする意識と実践力を向上することができた。

第２学年数学科学習指導案

日　時　平成３０年１１月２８日
学　級　２年Ｂ組　男子１５名　女子１４名
授業者　中舘　一穂

１　単元名　５章　三角形と四角形

（２）生徒観　（前段略）

筋道立てて説明する学習として、本単元で扱う図形の性質の証明があるが、苦手意識を持つ生徒が多い現状にある。原因としては、生徒たちが、証明に必要性を感じていないことや、事象を一つ一つ丁寧に扱い、それらを組み立てながら証明していくための方針立てが不十分なことにあると考える。

（３）指導観

本単元では、既習の図形の性質や図形の定義から、新たな性質を論理的に考え証明していくことが主な活動になってくる。説明することに苦手意識を持っている生徒が多い本学級においては、証明の方針を立て、見通しを持たせてから進めていく必要がある。また、証明の必要性や意義を感じさせるために、操作や実験と証明の意義を繰り返し伝えることが大切であると考える。証明を書くことに苦手意識が生まれないよう、証明の型にとらわれすぎず、自分の言葉で論理的に説明させていく。そして、その過程にグループ活動を取り入れることにより、他者の証明の進め方に触れ、自分の考えと比較することを通して、より適切な表現ができるようにしていきたい。

６　本時の指導

（３）展開案

段階	学習活動	教師の支援
展開	３　学習課題を確認する。 平行四辺形の性質を利用し、三角形の合同条件から OE≡OF を証明しよう。	
	４　解決の見通しを立てる。 〈予想される生徒の反応例〉 ①結論は？ OE=OF がいえればよい。 ②着目する三角形は？ △AOE と△COF △EOD と△FOB ③等しい辺や角に印をつけると？ ④使う三角形の合同条件は？ 一組の辺とその両端の角がそれぞれ等しい	・　図の中に、等しい辺や角などの印やその根拠を記入させ、証明の方針を立てさせる。 ・　努力を要する生徒に対しては、括弧埋め形式の証明ヒントカードを配る。 ・ノートを見る視点を与える。 ・　辺や角が等しいことが理由を添えて記述されているか。 ・　合同条件が記述されているか。 ・　結論が記述されているか。
	５　自力解決する。 ・　△AOE と△COF に限定して解決を行う。	

中舘教諭・管内初任研の学習指導案（一部抜粋）

（２）「家庭学習エクササイズ」の取組

①第１回家庭学習アンケート実施
９月１４日（金）

調査結果から、改善のターゲットを「何をやればいいか分からない」生徒とした。
（調査の詳細は⑤を参照）

②「家庭学習エクササイズ」講習の実施
９月２０日（木）

生徒の家庭学習に対する目的意識を向上させ、授業と連動した家庭学習を行わせるため、全校生徒に対して「家庭学習エクササイズ」講習を行った。指導した内容は、以下のとおりである。

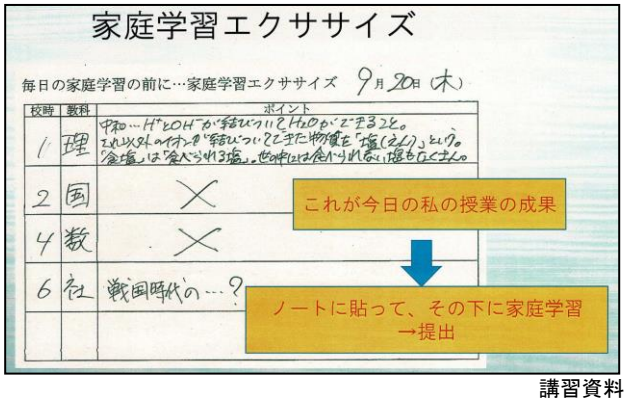
・エビングハウス曲線等を用いて、継続することの学習効果を説明。

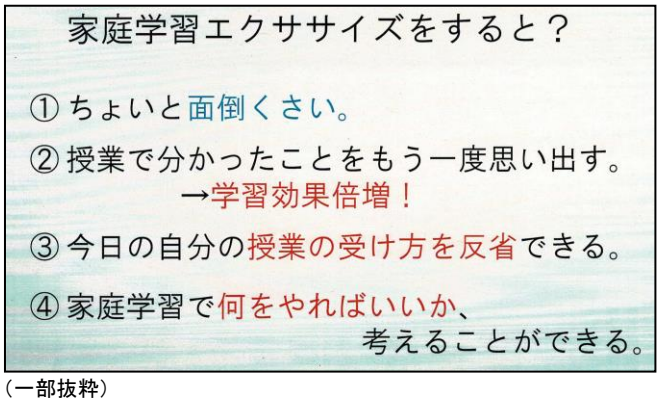
・その日の授業内容（５教科のみ）を思い出すことが目的であること。

・B6 サイズの表に、その日の授業内容を思い出しながらできるだけ詳しく書くこと。

・自分の現状を知るため、正直に記入すること。思い出せない授業は×と記入して良いこと。

講習の様子





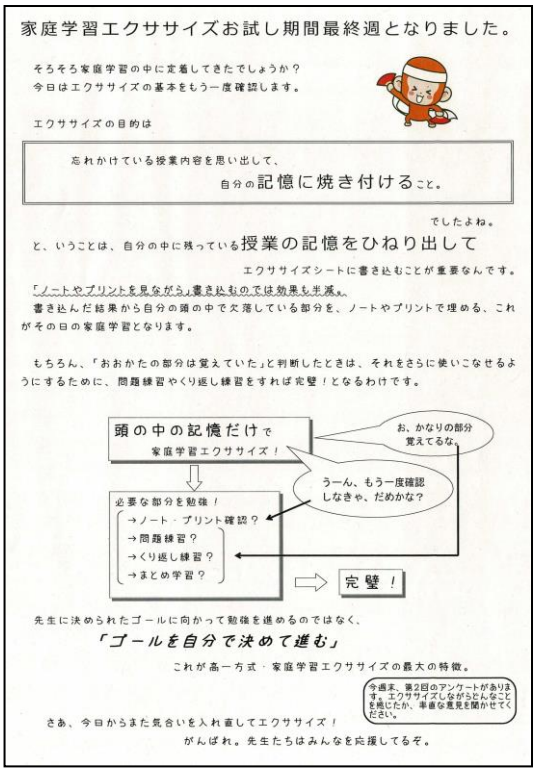
講習資料（一部抜粋）

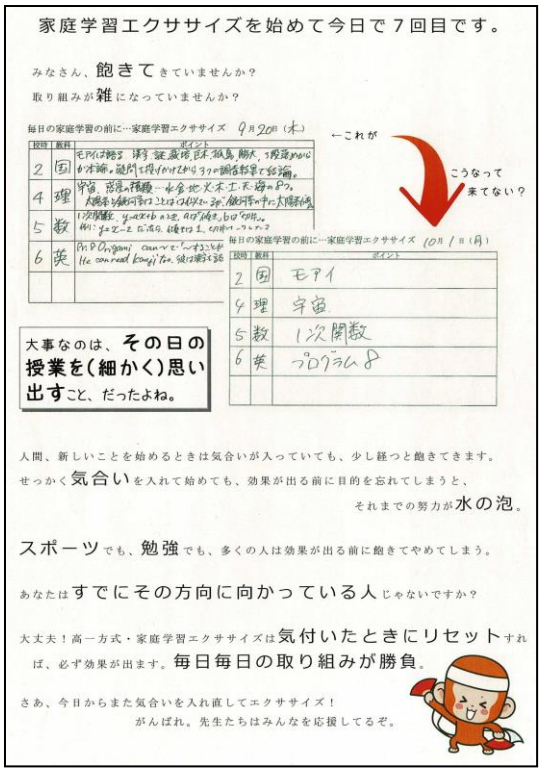
③「家庭学習エクササイズ」期間の設定と実施　９月２０日（木）～１０月１２日（金）

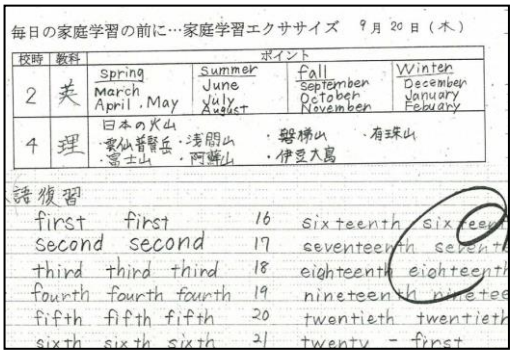
前述の講習を受けて期間を設定し、１５回（平日のみ）実施した。取り組ませ方（ノートへの貼り方、その後の活用方法等）は、各学年に任せることとした。

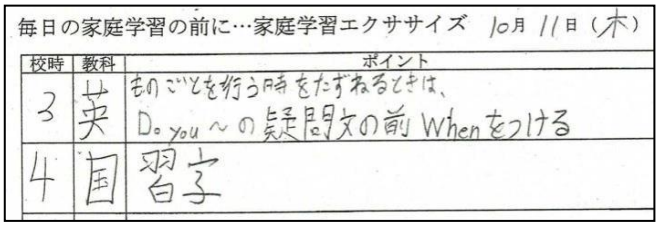
④途中経過の振り返り

設定期間中、２回にわたって途中経過の振り返りを各学級で行い、取り組み方が雑になってきていること、目的の再確認、及び期間終了後の取組について、担任が指導した。









生徒によって取組内容の差はあるが、その日の授業に応じて振り返りをする習慣がついてきている様子がうかがえる。

⑤第２回家庭学習アンケートの実施と分析　１０月１２日（金）

家庭学習エクササイズ実施後の、生徒の変容を確認するため実施した。質問内容は第１回アンケートと同じである。（数値は第１回→第２回を示す）

ア　家庭学習時間は？

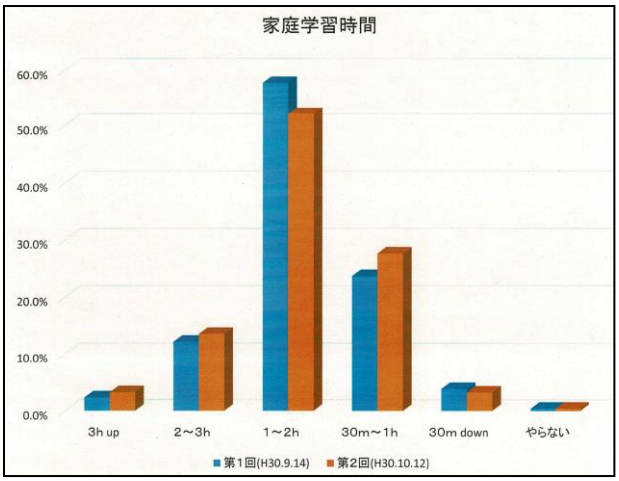
３時間以上　2.3% → 3.2%
２時間以上３時間未満　12.2% → 13.6%
１時間以上２時間未満　57.6% → 52.0%

＜結果＞

・３時間以上が 0.9 ポイント増加、２時間以上３時間未満が 1.4 ポイント増加した。

・取組時間の平均は、１時間２５分から１時間２６分と１分間増加した。

・２時間以上取り組む生徒が増えた一方で、１時間以上２時間未満も増加した。新人戦県大会や文化祭の取組時期が重なったためそれらが影響したと考えられる。



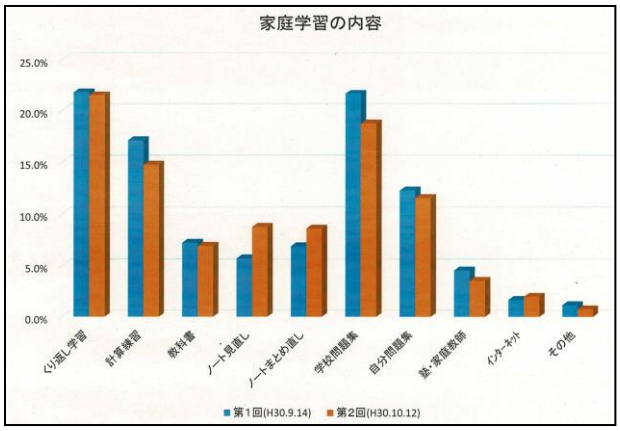
イ　宿題以外にやっている家庭学習の内容は？

繰り返し学習（漢字練習・単語練習）　21.8% → 21.5%
計算練習　17.1% → 14.7%
ノートの見直し　5.7% → 8.8%
まとめ直し　6.9% → 8.6%
学校問題集（ワーク）21.6% → 18.7%

＜結果＞

・ノートの見直しとまとめ直しを合わせて 4.8 ポイント増加した。

家庭学習エクササイズの取組が好影響を与えていると考えられる



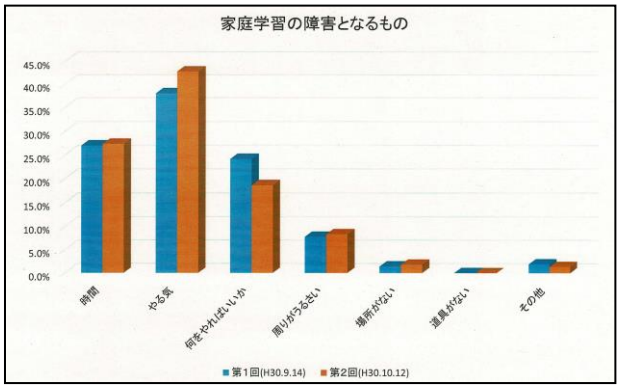
ウ　家庭学習の障害となっているものは？

時間がない　26.9% → 27.3%
やる気が出ない　37.9% → 42.7%
何をやればいいか分からない 24.1% → 18.6%

＜結果＞

・改善のターゲットとしていた「何をやればいいか分からない」が 5.5 ポイント減少した。

この回答の変化については、χ二乗検定においても有意差が認められた。（p=0.045<0.05）



エ　家庭学習エクササイズをやってみての感想は？

・どんな学習をするか考えられるようになった。　44.0%
・家庭学習を始める良いきっかけになった。　21.1%
・次の授業内容がスムーズに頭に入るようになった。　14.1%
・面倒なだけで、家庭学習をやろうという気は起こらなかった。　8.9%
・続かなかった　8.6%
・その他　3.4%

（３）　家庭を巻き込んだ小中連携の取組

高田第一中学校学区（中１校、小５校）で連携して取り組む内容を「アクションプラン」としてリーフレットを作成し、各家庭に配付することで連携した取組を進めている。その中で学習についての取組は以下の２点である。

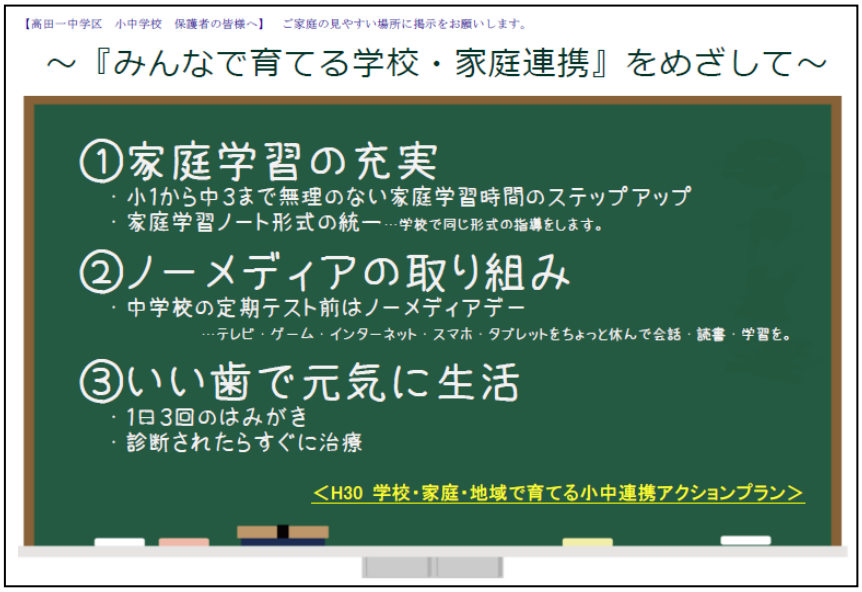
①家庭学習の充実

小１で 20 分、小２で 30 分…中１で 80 分、中２で 90 分、中３で 100 分という家庭学習の最低取組時間を設定し、小学校入学から中学校卒業まで無理のない家庭学習の指導を行っている。

②ノーメディアの取り組み

中学校の定期テスト前約１週間をノーメディア期間と位置づけ、小学校も共通して設定することで、ノーメディアの取り組みを小中連携で行い、家庭と共に取り組めるようにした。

右は小中共通で家庭に配付しているリーフレット。教務主任同士で調整し、今年度から実施している。



各家庭に配付したリーフレット

【成果と今後の方向性】

（１） AR と授業参観週間の取組から

授業参観週間の設定により、授業を参観する頻度は増えた。そして、「授業づくり３つの視点」と「言語活動」に着目した参観を行うことにより、自身の授業改善を図る教員も増えてきた。今後更に、授業参観週間と AR のリンクを図り、AR の手法を活用した授業改善の意識を全ての教員に浸透させていきたい。

一方、震災後、本校で力を入れている T.T の充実のため、教員一人一人の空き時間が少なく、担任は毎日の記録ノートや家庭学習ノートのチェックにも時間を必要としている。学年内での連携体制や時間割上の配慮により、できるだけ授業参観週間に参加できるような校内体制を組んでいく必要がある。AR と校内研究主題との関連づけを強化し、研究部と連携して、教員にとってより取り組みやすい内容にしていきたい。

TARGET７に対する本校の回答内容の変化については、過去３年間で積極肯定の割合が増加しているとのことが認められる。特に、今年度は７項目全ての回答が積極肯定であり、学校の組織的な取組としては今年度をもって完全に実施されたことになる。今後は組織的な取組と並行して全教員の意識向上にも取り組んでいきたい。

（２） 新入生学習状況調査と学習定着度状況調査結果から

Ｈ２９年度新入生学習状況調査と、Ｈ３０年度学習定着度状況調査結果において、同一集団の変容を追跡した結果が以下のとおりである。

※値は県比を示す

Ｈ２９新入生学習状況調査	
国語	数学
104.6	108.1

⇒

Ｈ３０学習定着度状況調査				
国語	社会	数学	理科	英語 (英検 IBA スコア)
107.3	114.7	112.5	99.2	104.1

ほぼ全ての教科において、県正答率を大きく上回る結果となった。また、英語における英検レベルの割合については、２年生段階ではあるが、準２級レベルから４級レベルの間に占める生徒の割合が県よりも高くなっており、中３段階で英検３級取得４０％以上の取得を目指し、指導を継続していきたい。

更に生徒質問紙「授業の内容がよく分かりますか」という問いに対しては、全教科において積極的肯定の回答が県より上回ることができた。

これは、「授業づくり３つの視点」や「言語活動」を柱に据え、上述（１）の取組を組織的に行ってきた成果と考えられる。今回の取組をとおして明らかになった課題に対しては、その都度改善を図り、継続して取り組んできたい。

（３） 家庭学習エクササイズの取組から

今年度、教員が主となって実施したのは、９月２０日（木）～１０月１２日（金）の約３週間であり、その後は生徒の自主性に任せる形で継続を図った。その結果、改善のターゲットとしていた「何をやればいいか分からない」と答える生徒が減少するなど、意識調査の一部で改善が図られたことが窺える。

しかし、意欲を持続させることに課題が見受けられたことから、継続的な手立てをどのように取っていくのかが課題としてあげられる。この取組がどのように学習成績に影響するかについても、今後検証していきたい。

（４） 家庭を巻き込んだ小中連携の取組から

小中連携のリーフレット配付については、今年度からの取組であり、教務主任が連携してその効果を検証していく。その中のノーメディアの取組については、テスト前の生徒の意識を学習に向けるため有効であると報告がある一方で、各学校の目的や取組内容を揃えきれずにいる。本校としては、課題を改善しながら、今後もこの取組を継続していきたい。